

(1)学校と自宅の往復の日々

満洲事変が起きたとき、加藤は東京府立第一中学校の1年生であった。この日は11歳最後の日だった。大学を繰り上げ卒業するのは1943(昭和18)年9月であり、加藤の学生生活はすっぽりと「十五年戦争」に包まれている。ことに中学校の五年間は、日本が軍国主義への道を足早に歩んでいた時期に重なる。このような時代を加藤はどのように過ごしていたのか。

小学校のときには、放課後に「補習授業」を受けて中学受験に備えたが、そのことに疑問を覚えなかった。ところが府立第一中学校は、第一高等学校への予備校的性格が強い。そういう学校の教育方針に、年嵩の増した加藤は疑問と批判を抱きはじめた。そして「優等生」であることから逸脱した。ほとんど脱落(ドロップアウト)した恰好だった。のちに中学校生活を「空白五年」と表現した。話し合える友もなく、部活動にも入らず、「極度に禁欲的な家庭と軍国主義的秀才教育の模範的な学校との間を往復」(『羊の歌』『美竹町の家])する毎日だった。時事問題について友人と意見を交わすようなこともなかった。政治的社会的問題に強い関心を抱くこともなかった。

私是一九三一年満洲事変のはじまった年に中学校に入り、一九三六年二・二六事件の年に中学校を出た。その間毎日私は新聞を読み、放送を聞いていたが、日本国が何処へ行こうとしているかを全く知らなかった。中学校は――少くとも中学校の社会は、大臣や財閥の理事長や青年将校とは、全く関係がなかった。彼らの一方が他方を暗殺しても、それは学期試験や運動会や夏休みというようなもっと重大な関心事の間に挿まれた小

さな事件にすぎなかった。荒木陸相の息子が同級にいたけれども、彼は目立たぬ生徒の一人にすぎず、誰からも特別の扱いを受けていなかった。すべての事件は、全く偶発的に、ある日突然おこり、一瞬間私たちに驚かしただけで、忽ち忘れ去られた。井上蔵相や団琢磨や犬養首相が暗殺され、満洲国が承認され、日満議定書が押しつけられ、日本国が国際連盟を脱退し……しかしそういうことで私たちの身の廻りにはどういふ変化も生じなかったから、私たちはそのことで将来身にどれほどの大きな変化が生じ得るかを、考えてみようとしなかった。（『羊の歌』「二・二六事件」）

このような政治的社会的事件が続出している時期に、加藤はひとりの友人とも話しあう関係を結べず、「想像の世界に逃れていた」のだった。その想像の世界とは、映画であり文学であった。